

おばあちゃんに会って

小 五

目にしよう害のあるおばあちゃんを知っています。母の仕事先で出会いました。

八十才くらいのおばあちゃんはいつも当たり前のように眼鏡をかけています。それなのに

「眼鏡も意味がない。」

と、言ったのでびっくりしました。おばあちゃんは、眼鏡をかけているときでもかいごの人の力がないと歩けないそうです。けれど、しせつのお祭りでは、「いっしょにまわろう。」とわたしに声をかけてくれました。車いすに乗ることも多いのですが、ゆっ

くりと立ち上がって、つえをついて歩くこともできます。歩くときはかいごの人がそばにいてくれました。わたしは、おばあちゃんが歩くとき、うでをやさしく持っていっしょに並んで歩きました。階段では、

「階段ですよ。」

と言いました。それは、四年生のごの総合の学習を思い出しながら、かいごの方を見てまねしました。いっしょにいる間、ずっとおしゃべりをしていました。わたしは、四年生のころの学校の様子や家で弟がいたずらしてこまることを話しました。おばあちゃんは、わたしの話をずっと楽しそうに笑いながら聞いてくれました。おばあちゃん

は、家でくらししているころ食べたおい

しいたいやきの話をしてくれました。
楽しかったです。

五年生になってすぐ、私は左目がは
れて眼帯をしました。すると、左目が
全く見えなくなりました。慣れている
はずの学校の階段なのに、ふみ外して
落ちてしまいました。音楽室では、ふ
めん台のスタンドが見えずに足をひっ
かけてしまいました。いつも、友だち
が身体を支えてくれたり、手をつかん
でくれたりしたので、がをしなくてす
みました。荷物を持つと体がふらふら
してしまいました。歩くのがすごくこ
わかったです。できるだけゆっくり、
ゆかをするようにして歩きました。
手すりがあれば持ちました。眼帯をし
ていたのは、わずか二、三日だけのこ

とだったのに、私にとってはとても長
く、不安に感じました。

そんな時、おばあちゃんの言葉を思
い出しました。

「目が悪くて自由に歩けなくなっただけ
れど、みんなと同じ人間。声を聞いて
いると面白いこともわかるし、笑
うこともできるよ。だから、楽しい
ことはいっぱいある。」

「もし、目が見えなくなることがあった
ら、かいごしてくれる人にきちんと
お礼が言える人になってほしいな。」
おばあちゃんは、「見える」「見えな
い」は目のことではなくて、耳や心で
受け止めることや、「ありがとう」の大
切さを教えてくれたのだと思います。